

	シヨウイ	
氏名	SHANG WEI	
学位の種類	博士（工学）	
学位記番号	博第1025号	
学位授与の日付	平成28年3月23日	
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当	課程博士
学位論文題目	中山道東美濃路における景観資源及び地域活性化に関する研究 (Study on Landscape Resources and Regional Revitalization in the Higashi Minoji Area of Nakasendo based on Walking Survey)	
論文審査委員	主査	教授 松本 直司 教授 兼田 敏之 教授 秀島 栄三 准教授 夏目 欣昇

論文内容の要旨

【研究背景】

中山道は、かつて江戸と京都を結ぶ日本の動脈であり、人が集まってできた「まち」を道によって結び、道によって「まち」や人を活気づけてきた。人々の移動手段は、「歩くこと」（徒歩）が主要なものであり、時間をかけて歩くことで、必然と相互交流と扶助が育まれてきた。しかし、産業革命以降、急速な近代化、高度成長期以降の急速な都市化やモータリゼーションは、利便性の向上に寄与し、観光として印象に残る景観を提供してきたものの、人々の相互交流や扶助を育むことを遠ざけ、中山道を記憶に残る原体験や舞台となることを遠ざけてきた。そこで、中山道を移動する方法として、かつての主たる移動手段である「徒歩」に注目した。ほかにも、歴史の軸をたどれば、バスや鉄道などの公共機関（産業革命以降）や船などを利用した水運（産業革命以前）などといったさまざまな選択肢を徒歩に組み合わせることで、まちをあるく人々に、それぞれの物語を自然の中でつくる手助けをすることが可能となる。徒歩を主とする移動を通じて、中山道を通じて育まれてきた「まち」、そして「まち」にある「生活」を知る手段を提案する。特に、かつて旅人が、たどった徒歩によるそれぞれの宿場町の生活空間の体験は、地域連合には欠かせないキーポイントである。住民同士のヒューマンスケールでの「協働と交流」、住民と観光客との「語らいと交流」、からきめ細かな、「心遣い」が可能であ

る。

【研究目的】

本研究は、中山道東美濃路における宿場町を結ぶ宿場町間の間宿を含む街道に注目し、景観資源の存在を確固とし、その特性を分析する。また、街道の観光魅力、観光環境、観光利便性を向上するに向けて、観光客の視点から環境整備する必要な要素と各地域の観光環境の特質を抽出する。各行政、地元住民まちづくり団体、観光案内施設の視点から、地元の生活環境と観光環境を豊かにするために、まちづくり活動の問題点や観光客対応の不足点を明らかにする。さらに、中山道東美濃路沿道地域の複数行政、まちづくり団体の連合として扱うことで都市の魅力の幅が増し、地元の生活環境を豊かにするとともに、この地域への訪問客を増大させ、地域が一体となった新たな文化創造のための資料としたい。

【研究対象】

研究対象地域は中山道の落合宿から太田宿に至る東美濃路であり、これに妻籠宿から落合宿までの区間が加わっている。この区間は、行政単位として長野県の南木曾町、岐阜県の中津川市、恵那市、瑞浪市、御嵩町、可児市、美濃加茂市が含まれている。この間には、旧宿場町が10、宿場町間が9存在し、延長約70kmに及ぶ。

【研究方法】

中山道東美濃路にある景観資源を把握するために、資料収集と徒歩調査により対象区間における景観資源とその名称、場所について調査を行った。得られた景観資源の数や分布密度を主成分分析による各区間の特徴を抽出した。

また、妻籠宿から太田宿まで計10宿場町とその9宿場町間の計19場所で日本人および外国人観光客を対象とし、SD法を用い、対象地域の観光環境についてインタビュー形式のアンケート調査を実施した。得られた結果を因子分析による観光客からの地域特徴を抽出した。

さらに、中山道東美濃各地区（南木曾町、中津川市、恵那市、瑞浪市、御嵩町、美濃太田市）の市役所、観光協会、商工会議所などの行政機関、まちづくり団体、NPO法人、協議会、青年会議所などの住民団体、観光案内所、観光案内センターなどの観光案内施設を調査対象とし、これから宿場町のあり方、まちづくり活動の実態、来訪者の対応についてアンケート調査を行い、当該地区住民の方の生活のあり方と観光客等の来訪の利便等についての将来計画を得るために、分析した。

【結論】

以上の研究により、中山道東美濃路における一体とした景観資源の分布図を作成し、正確な景観資源の名称、位置、種類の現状を把握し、中山道東美濃路の宿場町と宿場町間の特性、観光客と地元行政、住民の地元の視点から中山道東美濃路地域の価値、まちづくり活動及び観光客を受け入れる必要な取組みを抽出した。

論文審査結果の要旨

中山道の東美濃路地域は、これまで長野県の木曾路と比較して脚光を浴びることが少なかった。従って、この地域を対象とした研究論文は少なく、特に宿場町間の街道の魅力や観光客の動向についての研究はこれまでほとんどなされていない。この地域には伝統的な環境が維持・継承されているところが多く、地域活性化には有効な資源であると考えられる。日本への海外旅行者が急増し、かつリニア中央新幹線がこの地域に新駅を計画したことと時期を同じくし、本論文ではこの地域の活性化の切り札として景観資源の存在とその意義を明らかにすることを目的としている。対象とする中山道東美濃地域とは旧中山道の落合宿から太田宿の区間に、馬籠宿、妻籠宿を加えた、10宿場町9区間、70kmに及ぶ区間であり、論文は5章より構成されている。

【第1章 序論】では、研究の背景と目的、研究対象である中山道東美濃地域の概略、研究の構成、既往研究について述べている。

【第2章 中山道東美濃路における景観資源の現状と特性】では、対象地域における景観資源の現状について、資料調査及び現地踏査を行い、各宿場内と宿場間における景観資源を抽出し、それらを分類、集計するとともにその分布状況を把握している。これより、景観資源が宿場町の範囲のみではなく宿場間においても数多く分布していること、景観資源がそれぞれの区間で特徴があり、区間ごとの景観資源の分布特性を明らかにしている。

【第3章 中山道東美濃路における観光客の旅行環境評価】では、対象地域において宿場町とその9宿場町間それぞれに対応する計19地点において、日本人および外国人観光客を対象とした観光環境についてのインタビュー形式によるアンケート調査を実施している。その結果、内外を問わず観光客は「自然景観を堪能する」目的が最も多く、宿場町間の街道の重要性を認識している。観光客の属性、動向、観光意識、観光環境評価を明らかにし、観光客の視点よりの対象地域の交通や宿泊、案内などの課題と問題点を明確化している。

【第4章 地元官、民による中山道東美濃路地域のまちづくり意識】では、観光客を受け入れる側である対象地域を含む5市役所、1町役場それぞれの、観光協会、商工会議所、及びまちづくり団体、NPO法人、まちづくり協議会、青年会議所などの住民団体、観光案内所、観光案内センターなどの観光案内施設を調査対象とし、これからの宿場町のあり方、まちづくり活動の実態、来訪者の対応などについてアンケート調査を行っている。その結果、行政側のまちづくりと観光客の受け入れ意識、まちづくり団体の活動と観光客受け入れ意識、観光案内施設等の現状と観光客受け入れの意識などを明らかにしている。以上より、行政、まちづくり団体、観光案内施設等それぞれについて、旅行環境における問題点、活用すべき地域景観資源、お土産物、歴史まちづくりの課題を把握し、当該地域における将来像を示している。

【第5章 結論】では、結論と今後の課題を述べ、旧中山道を宿場だけの点的な場としてではなく、宿場を結ぶ街道を含めた線としての場が景観資源として有効であり、地域活性化に重要であると結論している。

以上の研究成果は、国際会議のプロシーディングとして2編（いずれも審査付き）発表されており、日本建築学会計画系論文集に1編（採用決定）している。国内外の人的交流が大きく変化しようとしている岐阜県東美濃地区において、地域活性化に有用な研究であり、建築・都市計画学における学術的価値が大きい。よって、本論文は博士（工学）の学位論文としてふさわしいものと認める。